

中学生のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価
：質問紙調査を基に

猪 崎 弥 生 酒 向 治 子 永 田 麻里子
田 中 俊 之 米 谷 淳

中学生のダンス・イメージ, ダンスに対する態度, ダンス授業の評価: 質問紙調査を基に

猪崎 弥生・酒向 治子
永田麻里子・田中 俊之・米谷 淳

Abstract

How should gymnastic teachers teach dance in the junior-high school? This question has become more important than before, after teaching dance in Gymnastics became mandatory in the junior-high school in 2008. In order to investigate into teaching and learning dance in the junior-high school, a survey was conducted in the junior-high school where boys and girls learn together in the same dance classes. The survey asked 447 pupils (201 boys and 246 girls) about their gendered image of dance (e.g. manliness/womanliness), their attitudes toward dance (e.g. preference for watching dance or for dancing), and their impressions after learning dance. The study found that neither boys nor girls have gendered images toward dance, but there were differences in their attitudes toward dance. First, girls' attitude dancing is relatively positive; while boys' attitude is relatively negative. Both boys and girls thought that learning dance was a relatively positive experience, but the ratio of positive reaction to dance learning was twice as much for girls as it was for boys. Moreover, a significant negative correlation between the dance image and the attitude toward boys dancing was found. The study suggests that sex differences in attitudes toward dancing and a belief in a gendered relationship between the image of dancing and students' reaction to dancing still exists.

1. はじめに

中学校の体育におけるダンスは、平成元年に学習指導要領改訂がなされるまで専ら女子が学習する内容とされてきた。その後、ダンスは平成20年度の新学習指導要領改訂により、中学校1・2年において男女必修化された。学校体育の現場は、こうした変化に対応しようと様々な取り組みをし始めており、様々な課題と直面している⁽¹⁾。

そのような状況の下で、体育におけるダンスとジェンダーに関する研究⁽²⁾、ダンスのイメージや意識に関する研究⁽³⁾などが、1990年以降に多くなされるようになった。

ダンスに対する意識について、宮本(2001)によると、1996年度と2001年度に男女共習のダンス授業を実施した中学1年生を対象に、学習前と数時間の学習後にダンスが「男女どちらに向いているかどうか」について意識調査を行い、両年度とも学習前の多くの生徒は「ダンスは女子に向いている」と思っていたが、学習後には「特に男女に差はない」と意識が変容したことを報告している。その中で、2001年度には同様の調査をダンス単元終了後にも行い、男子の「ダンスは女子のもの」というジェンダー意識が5年間

で薄れつつあることを示唆する結果を得た。

また、中村 (2010a) が1991年度、1999年度、2010年度入学の男女大学生を対象にダンスに対するイメージについて比較分析したところ、男女とも「女らしい」イメージが減少し、「男らしい」イメージが増加していることが示唆された。中村 (2010b) は、大学生の男女ともダンスに対する「つまらない」「不格好な」「恥ずかしい」といったイメージが年々減少し、ダンスは「楽しい」「カッコいい」「自由な」運動とイメージするようになっていと述べている。

これらの研究から、中学生や大学生のダンスに対する意識やイメージは、女らしいイメージが弱まり、男女ともポジティブな傾向にあることがうかがえる。しかし、これらの研究は現在の中学生のダンスに対する意識やイメージを調査したものではない。従って、現在の中学生のダンスに対する意識やイメージを調査する必要があると考える。

そこで、本研究は現在の中学生を対象にダンスに対するイメージと態度を、質問紙調査を実施して検討する。具体的には、ダンスを「男らしい」とみるか、「女らしい」とみるかといったジェンダー・イメージ、及びそれとダンスに対する態度との関係性を検討する。

中学校1・2年でダンスが必修化された今こそ、ダンスの授業内容を検討するための前提となる中学生のダンスに対する意識やイメージの実態を捉え、授業内容を新たな視点で検討することが必要となる。先行研究を管見した限り、ダンスに対する意識やイメージの研究はいくつかなされているが、イメージという心に抱くものと実際にダンスに向かう態度との関係は検討されていない。ダンス・イメージと実際の授業に対する態度との関係性がいかなるものかを探ることは、必修化を見据えた男女共習ダンス授業内容を検討するための有効な資料になり得ると考える。

2. 方法

調査実施時期 2011年10月から11月

調査対象者 A中学校に在籍する1年生から3年生計447人。男女の内訳を表1に示す。1・2・3年のそれぞれ4クラス・7クラス・6クラスが調査に協力した。

調査方法 ダンス授業の単元の初回到授業前調査を行い、毎授業後には授業の感想を求める調査を行った。調査は、教員が質問紙を生徒に配布し、回答を求め回収した。

調査項目 初回の授業前の調査項目は、性別を聞く項目、小学校のダンス経験に関する3項目、ダンスへの態度に関する3項目、ダンスの動きに対するジェンダー・イメージをSD法で5段階評定させる15項目、ダンスが「男性的なイメージ」か「女性的なイメージ」なのかを聞く項目の合計23項目。

表1. 回答者の内訳

	男子	女子
1年生	75 (56.4%)	58 (43.6%)
2年生	94 (48.7%)	99 (51.3%)
3年生	32 (26.4%)	89 (73.6%)
	201 (45.0%)	246 (55.0%)

毎授業後の調査項目は、授業の感想を求める項目である。この調査は、ダンス授業終了時に、授業の振り返りとしていつも行っているものである。

研究目的に照らして、分析した項目は初回のダンス授業前にダンスへの態度に関する項目（問4, 5, 6）とダンス・イメージを「男性的なイメージ」か「女性的なイメージ」を聞く項目（問8），と初回の授業後の授業に対する感想を求める項目である。表2に分析した質問項目を示す。

表2. 分析対象とした質問項目

質問項目	選択肢（最もあてはまるもの1つに○）
授業前 問4. あなたはダンスを <u>することが好き</u> ですか。	1.好き 2.どちらかといえば好き 3.どちらかといえば嫌い 4.嫌い
問5. 4の回答理由について。	1.難しいから 2.体をよく動かすから 3.人と触れ合うから 4.人に見られるから 5.疲れるから 6.リズムにのるから 7.その他（ ）
問6. あなたはダンスを <u>見る</u> ことが好きですか。	1.好き 2.どちらかといえば好き 3.どちらかといえば嫌い 4.嫌い
問8. あなたはダンスに対してどのようなイメージを持っていますか。	1.男性的なイメージ 2.どちらともいえない 3.女性的なイメージ
授業後 自由記述（感想・気づき・ひとりごと、なんでもOK）	—

3. 結果・考察

3-1. ダンス・イメージ

問8のダンスに対して男性的なイメージ、どちらでもない、女性的なイメージを聞いた質問に対して、3学年合計447人のデータをもとにダンス・イメージの男女差についてカイ2乗検定を行ったところ、有意な男女差は認められなかった。ダンスに対して男性的・どちらともいえない・女性的と答えた回答者の割合は、全体でそれぞれ7.1%・75.2%・17.7%であった。男女別にみたダンス・イメージを図1に示す。すなわち、ダンス・イメージは、男女共「どちらともいえない」が7割以上であり、特にダンスが女性的であるとは思っていないことが示唆された。

3-2. ダンスに対する態度

次にダンスをすることの好き嫌い（好き1点、どちらかといえば好き2点、どちらかといえば嫌い3点、嫌い4点）、ダンスを見ることの好き嫌い（好き1点、どちらかといえば好き2点、どちらかといえば嫌い3点、嫌い4点）の質問項目に対して、男女差についてt検定を行ったところ、ダンスをすることが好きか嫌いかは（男子2.13<女子3.08 $t(422)=11.09$, $p<.001$ ）、ダンスを見るのが好きか嫌いかは（男子2.50<女子3.45 $t(422)=11.16$, $p<.001$ ）でどちらも有意な男女差が認められた。それぞれの男女別の平均を図2・図3に示す。

この結果から、ダンスをすることに対する態度もダンスを見ることに対する態度も女子の方が男子よりもポジティブであることが確かめられた。平均値をもとに推定すれば、女子はどちらについてもどちらかといえば好きであるのに対し、男子はどちらかといえば嫌いである。

さらに、これら2項目について、「好き」と「どちらかというとき好き」を選んだ回答者をポジティブ群、「嫌い」と「どちらかというとき嫌い」を選んだ回答者をネガティブ群として、問4の質問項目への回答理由（問

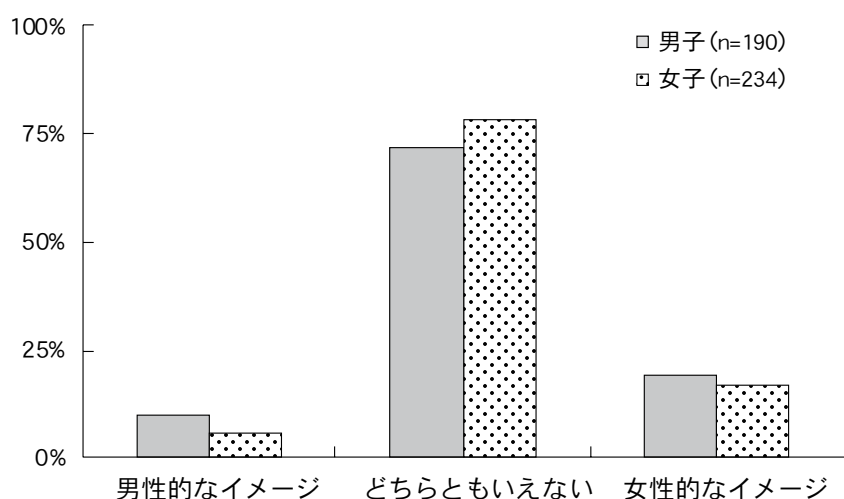


図1. 男女別にみたダンスに対するイメージ（授業前）

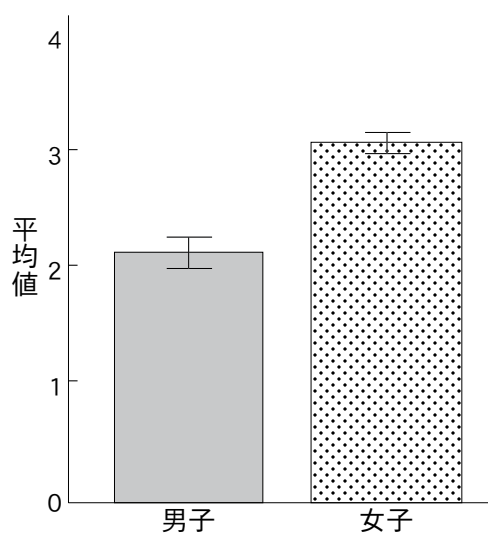


図2. ダンスをすることに対する態度

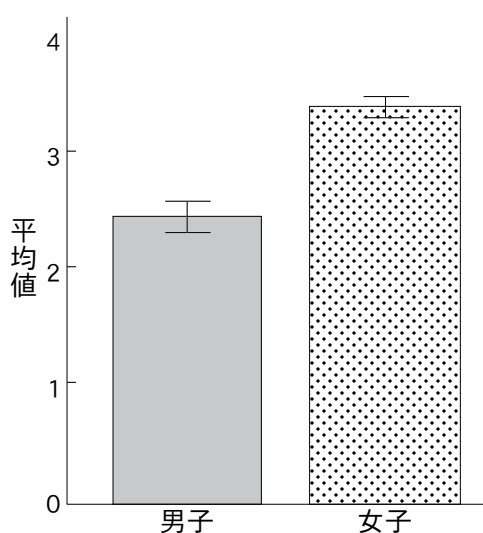


図3. ダンスを見ることに対する態度

5)を集計した（表3・表4）。表5・表6にその項目に「その他」と回答した者の自由記述をまとめた。

ポジティブ群・ネガティブ群のそれぞれについて理由を調べたところ、ポジティブ群は「体をよく動かすから」「リズムにのるから」を主な理由としてあげ、ネガティブ群は「難しいから」「人に見られるから」「疲れるから」を主な理由としてあげている。ポジティブ群で「その他」を理由に選んだ女子24人中17人は「楽しいから」と回答している。また、ネガティブ群は「その他」を選んだ男子20人中6人が「めんどくさい」、3人が「だるいから」と回答している。

表3. ダンスをするのが「好き」と「どちらかという好き」の理由（ポジティブ群）

	体をよく動かすから	リズムにのるから	人と触れ合うから	人に見られるから	難しいから	疲れるから	その他
男女(n=213)	86(33.0%)	86(33.0%)	6(2.3%)	3(1.1%)	2(0.8%)	1(0.4%)	29(11.1%)

表4. ダンスをするのが「嫌い」と「どちらかという嫌い」の理由（ネガティブ群）

	体をよく動かすから	リズムにのるから	人と触れ合うから	人に見られるから	難しいから	疲れるから	その他
男女(n=124)	4(2.3%)	9(5.2%)	4(2.3%)	35(20.1%)	35(20.1%)	15(8.6%)	22(17.7%)

表5. ポジティブ群における「その他」の自由記述内容

男子 (n=4)	おどるときもちいから	1
	面白いから	1
	楽しいから	1
	曲が好き	1
女子 (n=24)	楽しいから	17
	カッコイイから	1
	ノリノリになれるから	1
	ストレス発散	1
	ぜんぶ	1
	その曲が好きだから	1
	よく分かんけど	1
	「？」	1

表6. ネガティブ群における「その他」の自由記述内容

男子 (n=20)	めんどくさい	6
	だるいから	3
	リズム感がない	2
	おもしろくない	2
	まじで嫌いだから	1
	むずかしいから	1
	やったことないから	1
	なんとなく	1
	全て	1
	体を痛めそう	1
	「×」	1
女子 (n=1)	「…。」	1

3-3. ダンス・イメージと態度との関係

ダンス・イメージとダンスに対する態度の関係を調べるために、ダンス・イメージについては「女性的」3点、「どちらともいえない」2点、「男性的」1点とし、ダンスをすること・ダンスを見ることについては、「好き」4点、「どちらかといえば好き」3点、「どちらかといえば嫌い」2点、「嫌い」1点として、それら3つの変数間の相関係数を男女別に求めた。

その結果、男女間に違いが認められた。男子は、ダンス・イメージ、およびダンスをすることとダンスを見ることの間に負の相関がある。一方、女子についてはダンス・イメージとダンスに対する態度との間に相関はない。すなわち、男子はダンスに対して女性的と置いていれば、ダンスをすることと見ることに対して嫌いであり、ダンスを男性的と置いていれば、ダンスをすることと見るのが好きであるということである。

表7. 男子のダンス・イメージとダンスに対する態度の相関

	相関係数	
	1	2
1. ダンスに対するイメージ		
2. ダンスをすること	-.202*	
3. ダンスを見ること	-.314*	.505 *

* $p < .01$

表8. 女子のダンス・イメージとダンスに対する態度の相関

	相関係数	
	1	2
1. ダンスに対するイメージ		
2. ダンスをすること	-.096	
3. ダンスを見ること	-.044	.397*

* $p < .01$

3-4. 授業後の感想

自由記述させた授業後の感想については、表9に男女別にまとめた。

授業後の感想については、男子の36%が「楽しかった」と書いているのに対し、女子は78%が「楽しかった」と書いている。「楽しかった」と書いている内容を考察すると、下記に示す表10のような「楽しい」の具体的な内容が見えてくる。男女とも「楽しかった」と答えた生徒の約半数は、「純粋な楽しさ」であり、他の具体的な内容では「他者との交流」によるものも多く、また、女子では難しさや疲労感を乗り越えた課題達成的楽しさが多かった。

また、男子の「楽しかった」の具体的な内容である「思っていたより楽しかった」のような「意外性」が女子の「意外性」に比べて約2倍の17%であることは、ダンス・イメージと態度の関係性を考える上で大

表9. 授業後の感想（自由記述）

記述内容	男子 (n=181)		女子 (n=219)	
	件数	度数	件数	度数
楽しかった	70	65 (36%)	206	171 (78%)
疲れた	45	44 (24%)	48	48 (22%)
難しかった	18	18 (10%)	17	16 (7%)
面白かった	16	15 (8%)	27	25 (11%)
良かった	14	12 (7%)	27	27 (12%)
恥ずかしかった (周囲の目が気になった)	7	7 (4%)	5	5 (2%)
次も楽しみ (楽しみたい)	6	6 (3%)	20	20 (9%)
きつかった (ハード)	6	6 (3%)	3	3 (1%)
ノリノリでできた	1	1 (1%)	6	6 (3%)
恥ずかしがらずにできた (周囲の目は気にならなかった)	2	2 (1%)	8	8 (4%)

表10. 授業後の感想（自由記述）：「楽しかった」理由の背景

記述内容	記述例	男子（n=65）	女子（n=171）
		度数（％）	度数（％）
純粋な楽しさ	「楽しかった」 「とにかく楽しかった」	34（52％）	79（46％）
他者との交流	「（ペア）の〇〇さんと一緒に楽しめた」 「男女関係なく楽しめた」	12（18％）	29（17％）
意外性	「思っていたより楽しかった」 「意外に楽しかった」	11（17％）	6（4％）
課題達成的楽しさ	「難しかったけど楽しかった」 「疲れたけど楽しかった」	8（12％）	44（26％）
課題達成	「大きく体をつかって楽しく踊ることができた」 「リズムにのって楽しくできた」	6（9％）	15（9％）
他授業との比較評価	「昨年より楽しかった」 「ソフトテニスより楽しかった」	1（2％）	7（4％）
授業手法への評価	「暗くて楽しかった」 「冷凍みかんが楽しかった」	0（0％）	8（5％）

きな意味を持つと考える。つまり、ダンス・イメージではあまりポジティブではなかった男子がダンスをすると「意外と楽しかった」のようにダンスをポジティブに捉える方向に導ける可能性を示唆している結果ではないだろうか。

4. 討議

男女共習のダンス授業を受けている中学生にダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の感想について、質問紙調査をもとに検討した。データを分析した結果、男女とも大半が、ダンス・イメージは男性的なものでも女性的なものでもなく、「どちらともいえない」ものとして捉えていることがわかった。中学生を対象に実施された先行研究である調査結果と同様、中学生におけるダンス・イメージの男性的でもなく女性的でもない中立化が進んでいる様子がうかがえる。

ダンスに対する態度については、ダンスをすることについても、ダンスを見ることについても、有意な男女差が認められた。すなわち、そのどちらについても、女子がどちらかといえばポジティブな態度であるのに対し、男子がどちらかといえばネガティブな態度であることが示唆された。また、ダンス授業に対する生徒の評価は、「楽しかった」と答えた生徒の割合が他の項目より高く、全体的にダンス授業が生徒にポジティブに評価されていることをうかがわせるものの、そこにも男女差が認められた。すなわち、「楽しかった」と答えた生徒の割合は女子が男子の2倍以上あった。これはこれまでの調査結果から容易に推測されることであり、日ごろ多くの体育教師が経験しているものと推察できる。

さらに、ダンス・イメージとダンスに対する態度の間の相関を調べてみたところ、男子には有意な負の相関が認められたが、女子には有意な相関は認められなかった。すなわち、男子には、ダンスにより女性的なイメージをもつ者ほどダンスに対する態度がネガティブであるという関係性があることが示唆される。こうした関係性における男女差は、なぜダンスに対する態度やダンス授業への評価（反応）が女子はポジティブなのに男子はネガティブなのかを説明する一つの要因と考えられる。

本研究により、中学生のダンス・イメージが男女ともにますます男性的でもなく女性的でもないという中立化している、すなわちジェンダー・フリー⁽⁴⁾なものになりつつある一方で、ダンスに対する態度、ダンス授業に対する反応、ダンス・イメージとダンスに対する態度の関係性に依然として男女差があることが示唆された。今後調査研究を進め、こうした男女差を引き起こす要因は何か、それらが男女共習のダンス授業により変化するか、どうすればジェンダー・フリーなダンス授業が実現できるかについてさらに検討していきたい。

付 記

本研究は、科研費（22310160）の助成を受けたものである。

註

- (1) 中村（2009a.b, 2010c）の中学校体育教員を対象とした実態調査に基づく一連の研究。
- (2) 佐野（2002, 2003, 2004a, 2004b, 2005）、宮本（2001, 2002a. b）、芹澤（2009）の体育におけるジェンダーの問題を扱った研究。石井・武井（1993）、吉田（1986）、在間（1996）、北野・永吉・林（1997a.b）の体育教員のダンスに対するイメージについての研究。
- (3) 石井・武井（1990, 1991）、中村（2002）、中村・武井（2000）の大学生のダンスに対するイメージに関する研究。杉町ら（2009, 2011）の男子学生のダンスに対する意識と授業の課題についての研究。玉城・上原（1993）の中学生の男女共習による創作ダンスの実践的な授業を通して中学生のダンスや意識の変容を検討した研究。
- (4) 本研究のダンスにおける「ジェンダー・フリー」とは、ダンスは「女子のもの」という偏った考えが是正され、ダンスは「女子のものでも、男子のものでもない」という考えを示す。

文献

- 石井千代江・武井正子（1990）男女共修のダンス学習に関する基礎的研究
－男子学生のダンスに対するイメージの変容を通して－. 第41回日本体育学会大会号B：767.
- 石井千代江・武井正子（1991）男女共修のダンス学習に関する基礎的研究
－男・女学生のダンスに対するイメージの変容を通して－. 第42回日本体育学会大会号B：827.
- 宮本乙女（2001）ダンス学習とジェンダー 報告1－男女共習のダンス創作学習における、学習者の意識の変容－. お茶の水女子大学附属中学校紀要31：71-82.
- 宮本乙女（2002a）男女でダンスを学習すること－ダンスとジェンダー－. 女子体育44(2)：34-37.
- 宮本乙女（2002b）ダンス学習とジェンダー 報告2－ダンス学習による学習者と指導者の意識の変容－. お茶の水女子大学附属中学校紀要32：103-118.
- 中村恭子・武井正子（2000）ダンスの学習過程におけるダンスイメージの変容に関する研究 体育系学生を対象にして. 比較舞踊学研究 6(1)：25-34.
- 中村恭子（2002）女子学生のダンスイメージと運動継続意向に関する一考察－大学一般体育のカリキュラムを手がかりに－. 比較舞踊学研究 8(1)：56-69.
- 中村恭子（2009a）中学校ダンスの男女必修化の課題－中学校教員を対象とした調査にもとづいて－. 順天堂スポーツ健康科学研究 1(1)（通巻13号）：27-39.
- 中村恭子（2009b）中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容－平成19年度、20年度および24年度の年次

- 推移から－。(社)日本女子体育連盟学術研究26：16.
- 中村恭子（2010a）学校体育でのダンス経験の変化とダンスイメージの変容. 第61回日本体育学会予稿集：278.
- 中村恭子（2010b）変わるダンス教育と子どもたち. 女子体育52(6)：4-5.
- 中村恭子（2010c）中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容－東京都立中学校の実態調査から. 舞踊教育学研究12：56-57.
- 佐野信子（2002）大学体育におけるジェンダー・フリー教育（学習）の必要性. 女子体育第44(4)：20-23.
- 佐野信子（2003）体育の男女共習に関する中学生の意識. 弘前大学教育学部紀要89：131-139.
- 佐野信子（2004）一人ひとりの体育的学力を伸ばす体育授業の在り方について－本学部附属中学校での実践から－. 弘前大学教育学部紀要91：45-49.
- 佐野信子（2004）生涯スポーツ社会の創出に欠かせないジェンダーの視点. 女子体育46(10)：26-31.
- 佐野信子（2005）体育とジェンダー－ジェンダーの視点から体育授業を見てみると－. 立教大学ジェンダーフォーラム年報7：58-61.
- 芹澤康子（2009）体育授業にみるジェンダー・バイアス. 体育の科学59(9)：614-619.
- 杉町明子・新井野洋一・岡本浄実（2009）男子学生のダンスに対する意識からみたダンス授業の課題. 第60回日本体育学会予稿集：281.
- 杉町明子・新井野洋一・岡本浄実（2009）大学ダンス授業の受講による意識・態度変容とダンス授業の今後の課題. 第62回日本体育学会予稿集：272.
- 玉城昭子・上原廣子（1993）中学生・男女共習による創作ダンスの実践的研究－ダンスに関する意識及びイメージの変容－. 琉球大学教育学部紀要第一部・第二部42：303-314.

要約

中学校で体育教師がダンスをどのように教えるべきか。平成20年にダンスが中学校体育で男女必修となり、この問題の重要性が以前より増している。本研究は男女共習ダンスの授業に関する研究の手始めとして、中学生のダンス・イメージ、ダンスに対する態度、ダンス授業の評価について質問紙調査を基に検討した。男女共習ダンスを行っている中学校で、1年から3年までの生徒447人（男子201人、女子246人）に、ダンスは男らしいか女らしいか、ダンスをすること、ダンスを見ることが好きか嫌い、ダンス授業は楽しかったかなどについて評定してもらった。データを分析したところ、男女ともダンスは男らしいとも女らしいとも思っていない一方、ダンスをするのも見るのも女子がどちらかと言えばポジティブなのに対して男子がどちらかと言えばネガティブであることがわかった。また、ダンス授業は男女ともポジティブに評価されたが、性差が有意であった。すなわち、ダンス授業を「楽しい」と答えた生徒の割合は男女とも他項目より高かったが女子は男子の約2倍あった。さらに、男子はダンス・イメージとダンスへの態度の間に有意な負の相関があることがわかった。本研究から、中学生のダンス・イメージが男女とも中立化し、ますますジェンダー・フリーになっている一方で、ダンスに対する態度、ダンス授業への反応、ダンス・イメージとダンスに対する態度との関係には依然として性差があることが示唆された。
